

日 五 十 月 一 年 四 廿 治 明

佐太神社の龍蛇

第三卷

四六

イヒ數種アリ其支那ニ産スル者ハバシレウスキー氏之ヲ
 Accipenser. Mantschuricus. ニ充テタリ滿洲地方就中吉林
 省烏蘇里河及ヒ其支流ニ多ク又楊子江、黄河等ニモ出ツ
 其大ナル者重サ一千封乃至一千八百封ニシテ往々二千封
 ニ及ブモノアリ其游行スルヤ遲緩ニシテ春月河流ニ遡ル
 吉林省三姓ノ魚皮韃子滿洲ノ一會族ニシテ常ニ魚
 皮ヲ衣トス故ニ此名アリ專ラ之ヲ捕獲
 スルヲ以テ業ト爲シ之ヲ捕フルニ鈎ヲ以テシ或ハ鏢鎗ヲ
 用ウルコトアリ其肉潔白ニシテ味佳ク骨鱗共ニ食フ可シ
 清人ハ殊ニ其頭骨及ヒ軟骨ヲ賞シテ珍味嘉穀ニ列セリ故
 ニ其價最モ貴シ吉林省ノ官吏ハ年々之ヲ氷結シテ北京ニ
 致シ以テ皇帝ノ御膳ニ供スト云フ又コノ骨ヲ細截乾晒シ
 テ明骨トナシ俗ニ之ヲ鯉魚腦トイヒ鐘鳴鼎食ノ家常ニ其
 羹献ヲ儲ケ以テ賓客ヲ饗ス

雜 錄

●佐太神社の龍蛇

當松江市より二里ほどもある

處ニ佐太神社と云ふ尊々縣社あり古より大祭の時より必

す龍蛇と云ふものを衆人にねがましむ。此ものは右佐太
 村より程遠からぬ日本海沿ひたる七ヶ浦の内孰れうの
 浦まで年々大祭に當る月の内に上ると云ふ。又此蛇はい
 と神聖なるものにて土地の者に聞けば龍宮よりの特命全
 權公使なりと云へり。先月下旬より本月上旬にかけて丁度
 祭禮にて近郷近在よりの參詣人實に夥しく貴き人も賤き
 もものだれかれを論せず此社へまゐれば先の神蛇に對し
 て三拜九拜す。本年も新鮮なる龍蛇上りたりとて當地の
 新聞は左の通り報せり

龍蛇上る 去る廿七日午前十時一人の漁夫か魚瀬村の
 海邊にありしに見る間に沖合の海面瀾波を起し寄來る
 ものわれは漁夫は龍蛇神ならんと待ち居たるに果して
 黒背金紋の龍蛇神岩上に上れり漁夫ハ之を一器に入れて
 佐太神社に捧けたる由云々

右の報告により上りたるを鑑かなれば一度拜見せばやど
 思ふ折柄余か受持つ級の學生は動物學研究旁々共に行う
 んとを乞ひて止まず余も之に同意し校長に右神官へ宛て

たる依頼書をたのみ之を持ちて去る六日晝後早々勇に
 さんで校を出てたり。午後三時頃神社へ到着の上神官へ
 依頼状を出し一見を乞へり。神官の心よく之を領し先つ
 我々一行に神酒一杯つゝをあたへ頓て美麗なる高さ三寶
 を出し拜せしむ。これなん例の龍蛇の上りたる三寶にし
 て余の先つ瞳孔を定め御尊軀を熟々拜するに其形質の紛
 ふ方なる (Hydrophis) 屬なりや

先つ形質の大體を述べんに神蛇の三寶上に蟠屈し居りて
 「メンダ」と云へる海藻を敷き其長さの儘かにわからざ
 るも一尺餘、横徑中央の部に一寸五分許、背部深黒色
 に少しく藍色を帯び腹部は橙黄色にして光澤あり誠に奇
 麗なり(あまり奇麗過ぎるを以て少しく疑ひあり)鼻孔楕
 圓にして嘴上は開き脊腹共に細鱗を被り全身頗る側扁し
 て脊腹の界は稜あり尾部扁平橈状をなし色は前身と異り
 て淡黄色の不正形龜甲紋の如き斑點あり紋の内は灰色な
 り頭首長楕圓として鱗稍大なり(何分三寶の周圍に金
 網を張りつめたれば手に取り見ると能はず故に其形質中

佐太神社の龍蛇

洩れたる點も多うらん乞ふ察せよ) 以上の標徴を考ふる
 ときは或は夫の印度洋に産すると云ふ (Pelamis bicolor,
 Daud.) にと非る乎(練木氏の書によれば本邦に
 Hydrophis) 又四種ありと、若し此内のもの乎(尙識
 者の高教を待つ茲は謹で佐太神社龍蛇の本體を報告する
 と此の如し

附言當地杵築(出雲大社のある處)邊の海中よりも龍蛇
 上る由之れの前と異りて白蛇なりと。之れも衆人のた
 うとむ神蛇なりと。他日實見の時の委細御報致すべし
 本体を彼れ是れ云ふは神に對し恐れ多きとかは知らざ
 れども學問發達上どうも致方なし穴賢々々

當中學校、師範學校の御雇教師にて米國人「ラフカヂ
 ヲ、ヘレン」(Lafadio Hern) なるものあり氏は中々面
 白き人にて生徒に對する教授も信切にして自己の著書
 もあり文學者通信者としては随分價直ある人なり氏は
 熱心に當地の風土習慣等を取調ふる様子なるが夫の龍
 蛇の上ると聞き即日拜見に出掛け其奇なるもの驚け

第三卷

四七

りと云ふ其熱心感するにあまりありと云ふべし

明治廿三年十二月 松江 會員 渡邊 盈 作報

●同蛇に就て 明治廿三年十一月廿八日新潟市近傍

松ヶ崎濱に於て前種と同一ならんと推察する海蛇を漁獲し當時該縣尋常師範學校に於て之を購求せられたる由横忠一郎氏より圖畫を添へ本誌へ通報せられたり因て之を左に抄録す

體ノ背部黑色腹部クローム黄色燒狀ノ尾端ハ鷄卵色ニシテ鱗ハ又昔蠶種大ノ圓形ニテ前後共ニ一樣ナリ全體縦扁シ倒勝狀ヲ爲シ游泳ニ便ナリ肛門ハ燒尾下部最上ノ黒斑點中ニ開在スシロースノ動物學ニハ頭部甚タ小ニシテ認識スベカラズトアレ私ノ見ル處他ノ有毒類ノ頭ト同大ナリト存ス又 Dicolor トアレ Tricolor ノ方正シカラシ

全長六四、五セメ頭ノ長サ四セメ喙端ヨリ口裂マテ二、七セメ頭ノ周圍六、八セメ頭ノ周圍五、五セメ腹部七、七セメ尾ノ長サ七セメ尾ノ周圍五セメ

編者曰頭部ノ形狀ニ就キくらうす氏ノ動物書ヲ引證セラレタレハ該書中ニハ頭部甚タ小ニシテ認識スベカラズ等ノ語ヲ記載セザルヨウナリ又種名ニ就キ云々セラレタレハ Daudin 氏ノ命名セル種トハ別種ナラント謂ハル、ナラ兎モ角動物ノ種名ガ外貌ニ不合格ナリトテ之ヲ是非スベキモノニアラサルナリ

●ダーウキン氏ノ自傳(承前) 余ハ此處ニ航海中

起リタル諸ノ事柄一何處ヘ行キ何ヲ爲シタルカナツヲ記スルニ及バズ何トナレバ余ハ余ノ公ニシタル日記中充分委シク記述シタレバナリバタゴニヤノ大砂漠及ビテラデル、フエイゴノ蒼々タル山脈ハ余ノ心ニ深く高大ノ考ヲ惹起シタリト雖ハ熱帶地方ノ鬱蒼タル森林程今日ニ至ルマデ明活ニ余ノ心中ニ浮出ルモノハ非ザルナリ裸體ノ野蠻人ガ其ノ國土ニ流浪タルハ實ニ忘ル可ラザルノ觀ナリ馬上或ハ小舟ニテ時トシテハ數週間モ不墾ノ地ヲ旅行シタルキ余ノ愉快ハ實ニ深キモノナリキ此等ノ旅行ノ爲